埼玉大学紀要　教育学部，60(2)：149-180　(2011)

天台山の詩歌（其五）――盛唐（上）

薄井俊二　埼玉大学教育学部国語教育講座

キーワード：天台山、天台集、漢詩、仏教文学、道教文学

はじめに

本稿は、天台山に関わる詩歌について検討を加えることを通して、当時の人々の天台山に対するイメージとその変遷を考察しようとするものである[1]。宋李庚等の「天台前集」、明潘珹の「天台勝蹟録」[2]と近人の許尚枢「天台山詩聯選注」に掲載されているものを中心に、「全唐詩」の索引なども利用して選択する。今回は、盛唐期の詩十七点を取り上げる[3]。

●凡例

・収録の順番は、基本的には「全唐詩」の巻数に従うが、生卒年などが明らかな場合はそれに従って並べ直す。

・本文の底本は「前集」とし、未収のものは適宜指定する。

・【数字】に続けて「天台前集」での題名を掲げる。「天台前集」未収録のものは、底本としたものの題名を掲げる。

・☆で「前集」「勝蹟録」「許本」での収録状況を、★でその他の資料における収録状況を述べる。

・以下、**■本文と訓訳**、**■校勘**、**■語注**、**■口語訳**、**■解説**、の順で記述する。

・校勘で、「僊」と「仙」、「采」と「採」などの、同義の異体字は指摘を略した。

・原注は〔　〕で示し、脱字は□で示した。

・本稿で参照した文献の内、総括的なものとその略称は次の通り。

宋・李昉等奉勅撰「文苑英華」（文苑）…太平興国七年（九八二）

宋・李庚等撰「天台前集」（前集）…嘉定元年（一二〇八）、別編：同十六年（一二二三）

明・「正統道蔵」（道蔵）…正統十年（一四四五）

明・徐献忠編「唐百家詩」（唐百）…嘉靖十九年（一五四〇）序

明・潘珹編「天台勝蹟録」（勝蹟録）…嘉靖二十五年（一五四六）跋

明・釈伝灯撰「天台山方外志」（方外志）…万暦二十九年（一六〇一）序

清・彭定求等奉勅撰「全唐詩」…康熙四十二年（一七〇三）

清・「古今図書集成」（古今）…雍正四年（一七二六）序

清・董誥等奉勅撰「全唐文」…嘉慶十九年（一八一四）

許尚枢編著『天台山詩聯選注』（許本）…西安地図出版社、二〇〇四年

七　天台山の詩（其五）――盛唐（上）

【19】唐明皇御批并詩　李隆基

【20】送司馬錬師歸天台山　李隆基

【21】石橋銘　李隆基

【22】送楊道士往天台　張九齢

［参考］登南嶽事畢謁司馬道士　張九齢

【23】送蘇倩遊天台　張子容

【24】送楊法曹按括州　孫逖

【25】送周判官往台州　孫逖

【26】白龍窟泛舟寄天台學道者　常建
【27】將適天台留別臨安李主簿　孟浩然
【28】舟中曉望　孟浩然
【29】宿天台桐柏觀　孟浩然
【30】越中逢天台太一子　孟浩然
【31】寄天台道士　孟浩然
【32】尋天台山　孟浩然
【33】桐柏觀　孟浩然
【34】送邢濟牧台州　僧皎然（孟浩然）

【19】唐明皇御批并詩　唐明皇御批并びに詩

李隆基

★道蔵洞玄部霊図類、全唐詩巻三（詩のみ）、全唐文巻三七（御批のみ）

「御批」

勅得所進明照寶劒。等含兩曜之暉、稟八卦之象。足使光延仁壽、影滅豐城、佩服多情、慙式四韻。

■訓読

勅す、進むる所の明照寶劒を得たり。等しく兩曜の暉を含み、八卦の象を稟(う)けたり。光延仁壽たらしめ、影滅豐城たらしむるに足る。佩服すれば情多く、慙ぢ式(もつ)て四韻す。

■校勘

＊道蔵を底本とする。

題名を、全唐文は「答司馬承禎進鑄含象鏡劒圖批（司馬承禎の「含象鏡劍を鋳するの図」を進むるに答ふるの批）」とする。

［勅］全唐文では省かれている。

■語注

○批…臣下からの文書に対する天子の回答の文書。　○明照…明らかに照らす。「礼記」経解に「明照四海、而不遺微小（四海のすべてを明らかに照らして、わずかなものでも取り残さない）」とある。ここでは鏡のこと。　○兩曜…月と太陽。　○暉…輝に同じ。日光の輝きを表すことが多いが、ここでは日月両方の輝きを表しているようだ。　○仁壽…仁徳があり命が長い。「論語」雍也に「仁者、寿（仁のある人は寿命が長い）」とある。　○影滅豐城…豊城とは、預章の豊城の地に埋もれていた龍泉・太阿の二名剣が光を放って天に徹し、紫気が現れた故事（「晋書」張華伝）を指す。出現した宝剣の光で、影が消えたというのか。　○多情…心に感じることが多い。　○式…語詞の「以」と同義と解した。　○四韻…四韻の詩。八句からなる詩。

■口語訳

勅す、進められた明鏡と宝剣を受け取った。どちらも、日月両方の輝きを含み持っており、世界を象徴する八卦を受け持って

いる。光が延び、仁徳があって長寿となることができるし、豊城の宝剣のように、その輝きで影を消すほどである。この二つを身に帯びれば心に感じるところが多くなり、恥ずかしくも八句の詩を賦す。

「詩」

寶照含天地　寶照は天地を含み
神劍合陰陽　神劍は陰陽に合す
日月麗光景　日月は光景を麗しくし
星斗裁文章　星斗は文章を裁つ
寫鑑表容質　寫し鑑(てら)して容質を表し
佩服爲身防　佩び服すれば身の防ぎとなる
從茲一賞玩　茲(ここ)に一たび賞玩してより
永徳保齡長　永く徳保たれ　齡長し

■校勘

＊道蔵を底本とする。

題名について、道蔵は「唐明皇御批並詩」とのみ記し、詩の題名を記さない。全唐詩は「答司馬承禎上劍鏡（司馬承禎の劍と鏡を上すに答ふ）」とする。

■語注

○寶照…用例は見いだせないが、鏡のことを指す。　○含天地…鏡が天地を写し出していることをいうか。司馬承禎が献上したとされる鏡は「含象鑑（形象をその中に含んでいる鏡）」と命名されており、彼の手になるという「含象鑑文」（道蔵・全唐文所収）には「天地含象（天地のすべてにおいて形象を含む）」とある。また、同「含象鑑序」（同上）にも「含光写貌（光を含み貌を写す）」という表現がある。　○神劍合陰陽…神劍は、神より授かった剣。司馬承禎「劍序」に「劍面合陰陽（剣の両面は陰陽を併せ持っている）」とあり、福永光司は「具体的には彼の景震剣が陽〔景〕の面と陰〔震〕の両面をも」っていることをさすという(4)。　○日月…司馬承禎「含象鑑文」に「日月貞明」とあり、それは「易」繫辞伝に基づく。　○光景…日の光、あるいは輝き。　○星斗…北斗七星。景震剣の表面には、北斗七星が刻印されていた。　○裁…本来は「切る」の意味だが、切ったように整然と整えるの意味がある。　○寫鑑…漢語大詞典はこれを引いて「照鏡」と訳す。鑑は、鏡に照らし出す。　○容質…容貌と資質。　○佩服…身に帯びること。「御批」に「佩服多情」とあり、そこでは鏡と剣の両方を身に帯びると解した。

■口語訳

その鏡はすばらしくも天地をその中に写し出し
神より授かった剣の両面は、陰陽に符号している
鏡は太陽や月の光を受けて美しく輝き
北斗七星を刻印した剣は、あや文様を整然と断ち切ったように整える
鏡は容貌と資質のすべてを写し出し
剣を身に帯びれば、その身を防ぐ手だてとなる

今回ひとたび賞翫する機会を得てより
仁徳は長く保たれ、齢もいつまでも伸びるだろう

■解説

五言律詩。韻字は「陽・章・防・長」で、平水韻では下平七陽の韻。

撰者の李隆基は、唐六代皇帝の玄宗（六八五～七六二年、在位七一二～七五六年。明皇とも称される）。治世の前半は開元の治と呼ばれた善政を布いたが、後半になると国家財政の困難さなどから世が乱れ、安史の乱（七五五～七六三年）のさなか四川に逃れ、粛宗に譲位した。彼は熱心な道教信者であり、「送道士薛季昌」など道士との交流に関わる詩も数多く残している。ここに登場する司馬承禎は、唐代の道教界の大物だが、玄宗は彼を長安に招聘し、最終的には洛陽に近い王屋山の麓に陽台宮を建てて住まわせた。次の詩では、玄宗がその王屋山で、天台山に帰る司馬承禎を見送っている。

この御批と詩は、司馬承禎（六四七～七三五年）が、玄宗に自らが鋳造した剣と鏡を献上したのに応えたもの。道教と剣・鏡との関係については、福永光司に「道教における鏡と剣」（本稿注4）がある。その中で福永は、「司馬承禎において鏡と剣とが道教の『道』の象徴として、また帝王の霊威の象徴としてセットに組み合わされている」という。つまり鏡と剣は単なる実用品ではなく、神霊性や哲学性を帯びた宝器であり、皇帝の帯びる権威や神聖性の発揚につながるものであった。司馬承禎がこれらを鋳造して皇帝に献上したのも、そうした捉え方に沿ったものである。

なお福永は同書において、「その彼（司馬承禎のこと―稿者注）が鑑とともに剣をもまたみずから鋳造した事実については、そのことを明記した文章は見られない」とする。しかし、唐の道士徐霊府が撰した「天台山記」には、司馬承禎が初めに天台山の拠点としていた霊墟という場所を描写する中に「中間平地、立別院、營大丹爐、修劔鏡、並皆克就（中頃の平地に別院が建てられていて、そこには大丹炉があって、剣や鏡を造っていた。どちらもよくできたという）」という記事がある(5)。これは司馬承禎がみずから鏡や剣を鋳造していたことを伝えるものである。

【20】送司馬錬師歸天台山

司馬錬師の天台山に歸るを送る

李隆基

☆前集巻上、許本巻九
★方外志巻三〇、全唐詩巻三、古今巻一二五（天台山部芸文）

紫府求賢士　紫府に賢士を求め
清溪祖逸人　清谿に逸人を祖（はなむけ）す
江湖與城闕　江湖と城闕とは
異迹且殊倫　迹を異にし且つ倫を殊にす
間有幽棲者　間（このごろ）幽棲する者有り

居然厭俗塵　居然として俗塵を厭ふ
林泉先適性　林泉は先づ性に適ひ
芝桂欲調神　芝桂に神を調せんと欲す
地道踰稽嶺　地道は稽嶺を踰え
天台接海瀕　天台は海濱に接す
音徽從此間　音徽　此より間（へだ）たる
萬古一芳春　萬古一芳の春

■校勘

題目を、方外志・古今は「送司馬道士歸天台」、全唐詩は「王屋山送道士司馬承禎還天台（王屋山にて道士司馬承禎の天台に還るを送る）」とする。許本はこれに倣う。

［清］方外志・古今作青。　［溪］全唐詩作谿。　［祖］方外志作阻。　［間］全唐詩〔一作聞〕。　［棲］方外志作栖。　［芝］全唐詩〔一作松〕。　［稽］全唐詩〔一作雞〕。　［瀕］方外志作濱、全唐詩作濱〔一作瀕〕。

■語注

○紫府…仙人の居所。　○祖…はなむけをする。送別の宴を開く。

○江湖…隠遁の士の居所。陶淵明「与殷晋別詩」に「良才不隠世、江湖多賤貧（優れた才能は世に隠れてはいない。江湖にはわたしのような貧賤な者が残るばかり）」とある。「南史」隠逸伝序に「或遁迹江湖之上、或蔵名巌石之下（あるものはその痕跡を江湖のほとりに隠し、あるものはその名声を巌の下に隠した）」とある。　○城闕…都城。天子の居所。　○異迹…同じでない行為、行跡。　○殊倫…同類でない。晋左思「詠史」之六に「雖無壮士節、与世亦殊倫（壮士としての節度があるわけではないが、世間とは同類ではない）」とある。　○居然…安らかな様。安定した様。「詩経」大雅生民に「居然生子（安心して子を生む）」とある。　○林泉…山林と泉石。「旧唐書」隠逸伝崔覲伝に「爲儒不楽仕進、以耕稼爲業、隠於城固南山、夫婦林泉相対、嘯詠自娯」とある。　○適性…心に適う、性質に適う。劉向「列仙伝」に「寥寥安期、虚質高清。乗光適性、保気延生」とある。　○調神…精神を順適にさせる。劉宋徐爰「食箴」（「北堂書抄」巻一四二所引）に「一日三飽、聖賢通執。奉君養親、靡不加精。安慮潤気、調神暢情」とある。　○音徽…たより。音信。美しい音。徽音ならば、よい誉れ。麗しい音楽。よい音信。徽は琴の弦、あるいは琴じ。　○萬古…大昔。永遠。杜甫「戯作六絶」に「爾曹身与名俱滅、不廃江河万古流（あなたの身と名とはともに滅びても、黄河や長江の太古から未来へ続く流れは廃れることはない）」とある。

■口語訳

仙人の居所にすぐれた人物を求めたが
清らかな渓流で隠遁されようとする方に餞の宴を開く
結局の所、隠遁の士が隠れられるところと都城とは
同じ場所ではありえないのだ
この頃、隠棲しようとされている人がおり
心安らかで、世俗の汚れを厭うていらっしゃる
山林と泉石こそが先生の本性に適い

霊芝や桂によって精神を順適にしようとされている
彼方へ至る道は会稽の嶺を越えて遠く
その天台山は遙か海浜に接しているとか
ここで一旦別れたら便りを通じるのも難しいだろう
太古より永遠に続く、春の香を感じるばかりである

■解説

五言古詩。韻字は「人・倫・塵・神・瀕・春」で、平水韻では上平一一真の韻。

司馬承禎が天台山へ帰るのを送別したもの。帰隠先の天台山についての、具体的なイメージは描かれておらず、林泉や芝桂などの、自然と仙界を暗示するものが登場する程度である。なお全唐詩の題名によるならば、玄宗は王屋山においてこの送別の詩を作ったことになる。伝記資料によれば、天台山が遠いため、玄宗は洛陽に近い王屋山に道観を作り、司馬承禎をそこに住まわせたとある。そうであれば、王屋山に拠点ができた後も、司馬承禎は天台山に帰ることがあり、その折の作なのかもしれない。あるいは道観が造られ、司馬承禎が本格的に移り住む以前に、王屋山において司馬承禎を見送った時の作なのかもしれない。

【21】石橋銘　　石橋の銘

李隆基

☆許本巻五（羅漢道場［一］石橋方広）
★全唐文巻四一

梁園勝躅　　梁園は勝躅にして
碣館佳游　　碣館は游に佳し
苔深石暗　　苔は深く石は暗く
山斜路幽　　山は斜にして路は幽かなり
橋非七夕　　橋は七夕に非ざるも
節是三秋　　節は是れ三秋なり
爰停弄杼　　爰に停りて杼を弄び
共此淹留　　共に此にて淹留せん

■校勘

＊全唐文を底本とする。

■語注

○梁園…漢代、梁孝王が営築した兎園をいう。梁苑に同じ。李白「贈王判官詩」に「荊門倒屈宋、梁苑傾鄒枚」とある。　○勝躅…躅は跡。勝迹に同じ。すぐれた跡、名高い古跡、すぐれた事蹟。孟浩然「与諸子登峴山詩」に「江山留勝迹、我輩復登臨（江山に勝迹を留め、我が輩復た登り臨む）」、岑参「過王判官西津所居詩」に「勝迹不在遠、愛君池館幽（勝迹は遠きに在らず、君の池館の幽なるを愛す）」とある。　○碣館…宮殿の名。碣石館に同じ。河北省

の海浜にあったという。李嶠「九成宮呈同寮詩」に「碣館分襄野、平台架射峯」とある。　○佳游…佳遊に同じ。よい遊び。あるいは遊ぶのによい。李嶠「弾詩」に「侠客持蘇合、佳遊満帝郷」とある。　○三秋…秋の三箇月。王褒「九日従駕詩」に「律改三秋節、気応九鍾霜」とある。　○杼…機織りの道具のひとつ。

■口語訳

かの梁孝王の兎園はすぐれた古蹟であり
碣石館も遊ぶのによいところだった
（それら以上にこの天台山の石橋はすばらしく）
苔生した石橋は薄暗い中にあり
そこへ至る道は険しく、またかすかである
その橋は七夕に天に架かるものではないが
いまこの秋の節に横たわっている
さあ、足を留めて機織りをしながら
ともにゆったりとして長く留まろう

■解説

銘文であるが韻を踏む。韻字は「游・幽・秋・留」で、平水韻では下平一一尤の韻。

天台山きっての景勝である石梁飛瀑を描く。天台山の石橋を、七夕に天の川に架かる橋と重ね合わせているところが特色か。

【22】送楊道士往天台　楊道士の天台に往くを送る

張九齢

☆前集巻中

★文苑巻二二七（道門）、唐丞相曲江張先生文集巻四（四部叢刊初編、曲江と略）、唐百、方外志巻三〇、古今巻一二五、全唐詩巻四八

鬼谷還成道　鬼谷　還りて道を成し
天台去學僊　天台　去りて仙を學ぶ
行應松子化　行くゆく松子の化に應じ
留與世人傳　留りて世人とともに傳ふ
此地煙波遠　此の地は煙波遠く
何時羽駕旋　何れの時にか羽駕もて旋る
當須一把袂　當に須らく一たび袂を把るべし
城郭共依然　城郭　共に依然たらん

■校勘　なし

■語注

○楊道士…不詳。李白に「送楊山人帰天台」「駕去温泉宮後贈楊山人」「送楊山人帰嵩山」などの詩がある。ここにいう楊道士と同じか。後掲の熊飛は楊炎の父の楊播ではないかという。楊炎（七二八～七八一）は、徳宗時代に宰相をつとめ、両税法を創始した

唐の大臣。「旧唐書」巻一一八・「新唐書」巻一四五本伝。彼は「小楊山人」と号されたというが、それは父親などが「楊山人」と称されたのに対する呼称であろう。父の楊播は楊炎の伝記に記録が残る程度。それによれば、孝を以て称され、玄宗が諫議大夫に任じたがやがて棄官した。粛宗に至って、即家のままで散騎常侍に任ぜられ、玄靖先生と号された。　○鬼谷…鬼谷子。もと戦国時代の縦横家で、蘇秦・張儀の師匠であったという。のちに仙人とされた。あるいは鬼谷子が住んだという地名か（河南省登封県の東南）。　○成道…仏教の成仏に同じ。悟りを開く、悟道に達すること。　○松子…赤松子。古代の伝説の仙人。　○煙波…もやのこめた水面。転じて江湖によって遠く隔てられており、容易に逢いがたいことを表す。唐王涯「閩人贈遠詩五首（其三）」に「形影一朝別、煙波千里分（ひとたび別れてしまえば、遠く千里も隔てられることになる）」とある。　○羽駕…鸞や鶴などの鳥に牽かせる神仙の車。梁沈約「遊金華山詩」に「若蒙羽駕迎、得奉金書召（もし羽駕で迎えられたならば、金書の召を奉じることもできるだろう）」とある。　○把袂…衣の袖をつかむ。あるいは手をひく。親しみの表現。梁何遜「贈江長史別」に「餞道出郊坰、把袂臨洲渚（見送っては郊外の地までついてきて、袖をつかんで渡し場まできてしまった）」とある。　○城郭共依然…依然は昔のまま。「搜神後記」巻一に、漢代に丁令威という人が虚山で仙道を学び、鶴に化して故郷に帰ったところ、それと気づかなかった少年が令威の化した鶴を弓で射ようとした。鶴は空を飛びながら、「城郭は元のままなのに人間は入れ替わってしまった」と嘆いたという話がある。

■口語訳

鬼谷子はその地に還って悟りを開いたというが
楊道士もそのように天台山へ行って神仙の道を学ばれようとしている
あの赤松子の生まれ変わりの如くになろうとしているが
かの地に留まり続けて、世の人々に道を伝えられるのだろう
この地は天台山からは煙る江湖によって遠く隔てられており
鸞や鶴が牽く車に乗り還ってこられるのはいつになるだろうか
別れに臨んで今一度袖をつかんで親しみを示そう
ご帰還の時には城郭は昔のままでも、人は既に代替わりをしているだろうから

■解説

五言律詩。韻字は「僊・傳・旋・然」で、平水韻では下平一先の韻。

張九齢（六七八～七四〇年。生卒年は、植木久行「唐代詩人生卒年論拠考三題―張九齢・李益・張説」『中国文学研究』［一六号、一九九〇年］による。）は、韶州曲江（広東省）の人で字は子寿。武后の神功元年（六九七）に進士試験の資格を得、長安二年（七〇二）に進士に合格。中宗朝で登用され、玄宗朝に至って張説に認められて要職を歴任し、宰相として活躍する。しかし李林甫から疎んじられて、開元二十五年（七三六）に荊州長史に左遷させられる。その後は憂いに沈み、開元二十八年（七四〇）に告暇して故郷の曲江に帰り、そこで卒した。諡は文献。「旧唐書」巻九十九・「新唐書」巻一二六本伝。その詩風は「神味超逸」と

称される。その詩文集について、「唐百家詩」では「張九齢集六巻」とし、四部叢刊所収の「唐丞相曲江張先生文集」は二十巻である。そのうち巻二から巻五に詩を収める。

四部叢刊所収の「唐丞相曲江張先生文集」は、明憲宗の成化九年（一四七三）の序があるが、熊飛によれば、複印本であろうという。校注本に熊飛校注『張九齢詩校注』（中華書局、二〇〇八年）があり、和刻本に『曲江張先生詩集』巻下（三巻　久田湖山点　寛政十一年刊［和刻本漢詩集成唐詩第一輯］）などがある。

この詩は、楊道士という人物が天台山に向かうのを見送る送別の詩である。鬼谷子や赤松子などの古代の仙人をあげ、楊道士がそれらに匹敵する存在であることを歌う。そして彼が向かう天台山は、彼方にある神仙の山であり、そこで修行を積んだ楊道士はきっと神仙に化されるだろうという。

作詩の年代ははかりがたいが、熊飛は開元二十五年（七三七）の、荊州長史左遷以前の作ではないかと推測する。玄宗朝のいつか、であろう。見送られる楊道士は不詳。熊飛の推測するごとく楊播だとしても、その人となりはよくわからない。また「方外志」「歴世神仙体道通鑑」などの後世の資料にも、それらしき人物は見あたらない。

しかし、天台山に直接関わる人物で詩歌に登場するのは、この楊道士は唐代では司馬承禎に次いで二人目である。この詩では、天台山は、神々の棲まわれる茫漠とした神山ではなく、眼前の人間が尋ねる場所として、実体を帯びた山岳として捉えられている。

【参考】

＊天台山には関わらないが、司馬承禎と張九齢との関わりを示す詩をあげておく。

登南嶽事畢謁司馬道士　　張九齢

南嶽に登り、事畢り、司馬道士に謁す

☆前集・許本収録せず

★文苑巻二二七（道門）、曲江巻三、唐百、全唐詩巻四七

將命祈靈嶽　命を將って靈嶽に祈り
迴策詣眞士　策を迴らして眞士に詣る
絶跡尋一徑　絶跡に一徑を尋ね
異香聞數里　異香　數里に聞こゆ
分庭八桂樹　庭を分つ八桂の樹
肅客兩童子　客を肅（すす）む兩童子
入室希把袖　室に入りて袖を把るを希み
登床願啓齒　床に登りて齒を啓するを願う
誘我棄智訣　我を棄智の訣に誘ひ
迨茲長生理　茲の長生の理に迨（およ）ぶ
吸精反自然　精を吸ひて自然に反り
鍊藥求不死　藥を鍊りて不死を求む

斯言眇霄漢　斯の言は霄漢に眇たりて
顧余嬰紛滓　余を顧りみるに紛滓に嬰(かか)れり
相去九牛毛　相い去ること九牛の毛なるも
慚歎何知己　慚ぢ歎ず　何ぞ己を知らん

■校勘

題名を、文苑は「祭南嶽事畢謁司馬道士」とする。熊飛はそちらがよいという。

［徑］文苑作逕。　［客］前集・唐百・曲江作容。倣文苑改客。　［袖］前集・唐百作神。倣文苑・全唐詩改袖。　［床］唐百作牀。　［迨］前集・唐百作迫。倣文苑・全唐詩改迨。　［余］文苑作予。唐百作子。　［何知己］前集作知何已、文苑［集作何知已］。以意改。

■語注

○將命…命令を実行する。　○絶跡…外部との交渉がない。　○八桂樹…八本の桂の木。「山海経」海内南経に「桂林八樹、在番隅東」とあり、孫綽「遊天台山賦」に「八桂森挺以凌霜、五芝含秀而晨敷」とある。　○肅客…客を導く。「礼記」曲礼に「主人肅客而入」とある。前集らは「肅容」とする。そうであれば、つつしむ姿。　○把袂…【22】語注。　○床…腰掛け、色々なものを載せる台。　○啓齒…笑う。「荘子」徐無鬼に「吾君未嘗啓齒」とある。　○棄智…聡明や智巧を捨て去る。「老子」第十九章に「絶聖棄智、而民利百倍」、「抱朴之」明本に「外物棄智……道家之道也」とある。　○迫…迨ならば、至る、及ぶ。　○眇…かすか、はるか。　○霄漢…大空。　○九牛毛…ほんのわずかの取るに足りないものの喩え。司馬遷「報任安書」（「漢書」司馬遷伝）に「仮令僕伏法受誅、若九牛亡一毛、与螻蟻何以異」とある。　○何知己…もと「知何已」とあり、また文苑に引く集では「何知已」とする。どちらも意味が取りがたかったので、標記の様に改めた。諸賢のご教授を請いたい。

■口語訳

皇帝の命を受けて霊山で祭祀を行い
杖を転じて真人のもとを訪ねた
人里離れた絶人の地に一筋の小道をたどれば
数里も離れたところへも、妙なる香り（気配）が漂ってくる
その庭には、目印となる八本の桂の木が生えていて
二人の童子が訪問客を導いてくれる
道士のお住まいに入ってよしみを通じ
腰掛けに座って対面して歓談しよう
道士は私を智慧を捨て去る秘訣に誘い
長生のことわりにまで及ぼしてくれる
精和の気のみを吸って自然に還り
仙薬を錬って不死を求めようとする
道士のお言葉は、大空の彼方のかすかなもののごとくであり
我が身を省みるに世俗の汚れにまみれているばかり
道士と私との差はほんのわずかというが
身の程も知れない己を恥じ入り嘆くばかり

■**解説**

五言古詩。韻字は「士・里・子・齒・理・死・滓・已」で、平水韻では上声四紙の韻。

南岳に行き、司馬承禎に拝謁した折の作。司馬承禎が南岳衡山を訪れたのは、「茅山貞白先生碑陰記」（清十四巻本「茅山志」巻四）によれば、開元十二年（七二四）。それによれば、衡岳に行く（碑では「帰」）途中に茅山に立ち寄ったところ、茅山の貞白先生（陶弘景）を顕彰する石碑を作ることになり、彼が碑文を述して揮毫もしたという。それには開元十二年九月十三日の日付がある。一方、張九齢の年譜である楊承祖『唐張子寿先生九齢年譜』では、「唐大詔令集」により、張九齢は開元十四年（七二六）正月に南岳で祭祀を行ったとし、その足で司馬道士に拝謁したとする。ここには二年の隔たりがある。あるいは司馬承禎が南岳を訪れたのは複数回に及ぶのかもしれない。そうであれば、この詩の制作は開元十四年とするのがよかろう。また南宋陳田夫「南嶽総勝集」は、開元の初め、司馬承禎が海山から桴に乗じて衡岳に至り、九真観の北一里の地に庵を結んだ。そこへ丞相の張九齢がしばしば訪れたという挿話を載せる。司馬承禎が本格的に王屋山に移ったのは、神塚淑子(6)によれば、開元十五年（七二七）である。いずれにせよこの詩は、司馬承禎の拠点が、まだ天台山にあった時代の作ということになる。

【23】送蘇倩遊天台　蘇倩の天台に遊ぶを送る

張子容

☆前集別編

★文苑巻二六八（行送）、古今巻一二五、全唐詩巻一一六

靈異尋滄海　靈異　滄海を尋ね
笙歌訪翠微　笙歌して翠微を訪ぬ
水鷗迎共狎　水鷗迎へて共に狎れ
雲鶴待將飛　雲鶴待ちて將に飛ばんとす
琪樹嘗仙果　琪樹に仙果を嘗め
瓊樓試羽衣　瓊樓に羽衣を試みる
遙知神女問　遙に知る神女の問ふを
獨怪阮郎歸　獨り怪しむ阮郎の歸るを

■**校勘**

［訪］文苑作討。　［水］文苑作江〔一作水〕、全唐詩作江。［共］文苑作近〔一作共〕、全唐詩〔一作近〕。　［嘗］文苑作攀〔一作嘗〕、全唐詩〔一作攀〕。　［樓］全唐詩〔一作枝〕。

■**語注**

○靈異…すぐれてふしぎなこと。神異。霊妙。　○翠微…山が緑にけぶっている様。あるいは緑にけぶる山。左思「蜀都賦」に「鬱葢葢以翠微、崛巍巍以峨峨」とある。　○笙…王子晋が得意とし

ていた楽器。　○水鷗…かもめ。陶潜「遊斜川詩序」に「魴鯉躍鱗於将夕、水鷗乗和以翻飛（魴や鯉が暮れようとする流れに鱗を躍らせ、鷗が穏やかな大気に乗って飛んでいる）」とある。「列子」黄帝に、鷗が馴れて共に遊んでいる人がいた。ところが父親から鷗を捕まえてくるように命じられ、捕まえに行ったところ、鷗は二度とその人に近づかなかった、という説話がある。　○雲鶴…鶴。また世塵をはなれ山野に隠遁するひと。陶淵明「連雨獨飲」に「雲鶴有奇翼、八表須臾還（鶴にはすばらしい翼があり、世界のはてまですぐに飛んでいける）」とある。　○琪樹…玉の木、または玉のように美しい木。孫綽「遊天台山賦」に見え、天台山を歌う詩で頻出の語。　○瓊樓…玉の高殿、あるいは玉のように美しい高殿。瓊台と同義。こちらも孫綽「遊天台山賦」に見える語。　○阮郎…漢代、天台山に仙薬を採りに入った劉晨と阮肇が仙女に出会い、半年間もてなされて帰還したところ数百年たっていた、という話がある（「幽明録」など）。　○神女問…天台山の仙女が、阮肇らに「あなた方はどこから来たのか」と問うたように、蘇倩にも仙女が問いかけるだろう、という意味に解した。　○獨怪阮郎歸…阮肇らが数百年たって国に帰ってきた時、当時の人々は彼らが誰か分からず不思議がった。同じように貴方の天台山からの帰還はこれから数百年後であり、その時の人々は貴方のことが分からなくなっているだろう、という意味に解した。

■口語訳

霊妙神異を求めて滄海を渡り
王子晋のように笙を奏でまた歌って、緑にけぶる山を訪れようとされている
列子の説話のように無心になってカモメと戯れれば
霊鶴が一緒に飛ぼうと待っている
玉の木では神仙の果物をいただき
玉の楼台で仙人の衣の羽衣をはおってみる
仙女が貴方に問いかけることは遠くにいる私でも分かるけれど
阮郎のように数百年後に帰還されれば、人々は貴方のことを不思議に思われるでしょう

■解説

五言律詩。韻字は「微・飛・衣・歸」で、平水韻では上平五微の韻。

張子容は、「唐詩紀事」巻二三と「唐才子伝」巻一にわずかな資料が残るのみ。山本巌「孟浩然交友考」（『宇都宮大学教育学部紀要　第一部』第五一号、二〇〇一年）は、これらの資料によりながら彼の略歴を述べる。それらによれば、孟浩然と深い交友があることから、ほぼ同年代だ考えられる。孟浩然の生年には異説があるが、山本巌は天授二年（六九一）とする。張子容も七世紀末頃の生まれであろうか。成長して孟浩然とともに襄陽の鹿門山に隠棲し、修行や勉学に励む。そして科挙の試験に赴くのを孟浩然に見送られ（孟浩然「送張士容進士挙」）、先天二年（七一三）に進士に及第。長安滞在を示す詩（「長安早春」）がある。その後晋陵（江蘇省常州）や楽城（浙江省温州）の尉をつとめた。その楽城において孟浩然と十数年ぶりに再会したらしい（張士容「除夜楽城逢孟浩然」・「楽城歳日贈孟浩然」・「送孟浩然帰襄陽」、孟

浩然「除夜楽城逢張少府」)。これは開元十五年(七二七)のこととされる。その後、永嘉に赴き(張士容「自楽城赴永嘉枉路泛白湖寄松陽李少府」・「永嘉作」)、そこでも孟浩然と逢った(孟浩然「永嘉上浦館逢張八子容」)。そして離別に際し、孟浩然が「新年子北征」(「永嘉別張子容」)といっており、北に向かったようである。この間、どのような職についていたかは不詳。それ以後の足取りも不詳だが、「乱離に値ひ、江表を流寓して、官を棄てて旧業に帰った」(「唐才子伝」)とあり、最後は故郷で没したのであろう。詩集があったというが伝わらず、「全唐詩」は十七首を集めている。

この詩は天台山に遊ぶ友人を送別したものだが、友人である蘇倩は不詳。あるいは蘇倩子か。「全唐文」巻九四六に蘇倩子の「対造帳籍判」を載せるが伝記資料は全くない。

この詩の制作年代も不詳だが、開元年間あたりであろうか。先の張九齢の詩と同じく、生身の人間である友人が、天台山に向かうのを見送っている。そこでの天台山は、神仙や仙女の住む聖地であるとされており、この点では六朝以来の天台山観を受け継いだものである。

【24】送楊法曹按括州　楊法曹の括州を按ずるを送る

孫逖

☆前集巻上

★文苑巻二六八(送行)、全唐詩巻一一八

東海天台山　東海の天台山
南方縉雲驛　南方の縉雲驛
溪澄問人隠　溪は澄み　人の隠るるを問ひ
巖險煩登陟　巖は險にして登陟に煩はし
潭壑隨星使　潭壑は星使に隨ひ
軒車繞春色　軒車は春色を繞はん
儻尋琪樹人　儻(たま)たま琪樹の人を尋ねなば
爲報長相憶　報を爲して長く相い憶ふ

■校勘

[驛]文苑・全唐詩〔一作國〕。　[溪澄]文苑〔集作澄清〕、全唐詩〔一作澄清〕。

■語注

○楊法曹…不詳。法曹は司法官。「新唐書」巻四九百官志下では、外官の中に「法曹司法参軍事」がある。　○括州…浙江省のまち。麗水県の東南、括蒼山の麓。　○按…巡行、巡視。　○縉雲…括州に同じ。　○潭壑…深い谷。鮑照「登大雷岸、与妹書」に「思盡波濤、悲滿潭壑」とある。　○星使…天子の使い。後漢の和帝が二人の使者を益州に派遣したところ、天上で二つの星が益州の分野に動いたという故事による(「後漢書」李郃伝)。　○軒車…ついたてのある車。身分の高い人のみが使った。

■口語訳

東海にある天台山
その南方にある縉雲驛
そこは澄み切った渓流に隠れている人を捜さねばならず
登るのが難しい険しい岩山だろう
楊星使は深い谷を進まれるが
その車には春の気配がまとわりついていくだろう
もし玉樹のもとに住む人に出会えたら
便りを送り、とこしえに思いあうことにしよう

■解説

五言律詩。韻字は「驛・陟・色・憶」で、驛のみ平水韻では入声一一陌の韻、他の三者は入声一三職の韻。なお校勘に見える「國」は入声職一三職の韻。

孫逖（六九六～七六〇年、あるいは七六一生。卒年は、植木久行「唐代作家新疑年録　四　顔真卿・元徳秀・蕭穎士・蕭存・孫逖・趙冬曦・李華・呂温・呂渭・呂恭・梁粛」『文経論叢』［二六巻三号、一九九一年］による）は、「新唐書」によれば博州武水（山東省）の人。幼くして文才があり、十五歳で雍州長史の崔日用に認められ、開元に入って挙せられ、同十年（七二二）に賢良方正にあげられる。玄宗に認められ左拾遺となり、張説とも深く交わる。黄門侍郎の李嵩が太原に赴くのに随行し、彼の地で文士らと交わった。同二十一年（七三三）に長安へ戻り、集賢院集撰となったほか、中書舎人を経て、天宝三年（七四四）には刑部侍郎に至った。やがて病で免じ、上元元年（七六〇）もしくは同二年（七六一）に没した。蘇頲と併称され、顔真卿などとも交友があった。集三十巻があったというが散逸した。全唐詩は一巻を立て、六〇首あまりを載せる。

この詩は知人が遠遊するのを送別したもの。その中で遠方の神仙境に等しい場所として、東海の天台山と南方の縉雲驛を併挙している。

【25】送周判官往台州　　周判官の台州に往くを送る

孫逖

☆前集別編
★文苑巻二六七（送行）、全唐詩巻一一八

吾宗長作賦　　吾が宗　長く賦を作す
登陸訪天台　　陸に登りて天台を訪ぬ
星使行看入　　星使　行きて看入り
雲仙意轉催　　雲仙　意轉た催す
飲冰攀璀璨　　冰を飲みて璀璨たるを攀し
驅傳歷莓苔　　驅傳して莓苔を歴す
日暮東郊別　　日暮れて東郊に別る
眞情去不回　　眞情去りて回らず

■**校勘**

［冰］文苑作水。

■**語注**

○周判官…不詳。　○作賦…不詳。　○登陸…孫綽「遊天台山賦序」に「涉海則有方丈蓬莱、陸則有四明天台」とある。　○雲仙…用例に乏しい。あるいは雲山か。　○璀璨…光り輝いて美しい様。あるいはそういうもの。漢王延寿「魯霊光殿賦」に「汩磑磑以璀璨、赫燁燁而燭坤」とある。　○驅傳…駅伝の馬、あるいはそれに乗ること。　○莓苔…青い苔。孫綽「遊天台山賦」に「踐莓苔之滑石、搏壁立之翠屏」とある。

■**口語訳**

吾が祖先は長く賦をなしていて
天台山を訪ねたことがあった
あなたは天子の使者として天台山へ入っていき
雲のかかっている遠い山を前に、気持ちが次第にせきたてられるだろう
冷たい氷水を口にしながら光り輝く山をよじ登り
馬を走らせて滑りやすい苔の上を通っていかれるのだろう
日も暮れ、東の郊外でお別れの時となった
別れの情は尽きないがどうにもしようがない

■**解説**

五言律詩。韻字は「台・催・苔・回」で、平水韻では上平一灰の韻。

知人が台州へ出かけるのを送別。中で「吾宗長作賦，登陸訪天台」と彼の「宗」が嘗て天台山を訪れたことを記す。天台山のイメージは、前詩と同様、孫綽の賦の語などを用いた常套的なものに留まっている。

【26】白龍窟泛舟寄天台學道者

白龍窟に舟を泛(うか)べ、天台の道を學ぶ者に寄す　　常建

☆前集巻上

★唐百、全唐詩巻一四四、古今巻一二五

夕映山翠深　夕映えて　山　翠深く
餘輝在龍窟　餘暉　龍窟に在り
扁舟滄浪意　扁舟　滄浪の意
黯淡花影沒　黯淡として花影沒す
西遊入天台　西に遊びて天台に入り
南望對雲闕　南に望んで雲闕に對す
因憶莓苔峰　因りて憶ふ莓苔の峰
初陽濯玄髮　初陽に玄髮を濯ぐを
泉蘿兩幽映　泉と蘿と　兩つながら幽映にして
松鶴間清樾　松と鶴と　清樾に間(まじ)ふ

碧海營子神　碧海　子の神を營し
玉膏澤人骨　玉膏　人の骨を澤す
忽然爲枯木　忽然として枯木と爲り
微興遂如兀　微興　遂に兀の如し
應寂中有天　寂に應じて中に天有り
明心外無物　心を明らかにして外に物無し
環回從所泛　環回して泛ぶ所に從ひ
夜靜猶不歇　夜靜にして猶ほ歇(いこ)はず
澹然意無限　澹然として意は無限
身與波上月　身は波上の月とともにあり

■校勘

題名を、古今は「龍窟泛舟寄天台學道者」とする。

［映山翠］唐百・全唐詩作映翠山。古今作夕翠山。　［輝］唐百・全唐詩作暉。　［黯淡］唐百・全唐詩・古今作澹澹。　［遊］唐百・全唐詩・古今作浮。　［台］唐百・全唐詩作色、古今作邑。　［玄］古今作元。　［樾］唐百・全唐詩・古今作越。　［營］唐百・全唐詩・古今作瑩。　［泛］唐百・全唐詩作汎、古今作没。

［澹然意無限、身與波上月］古今二句無。

■語注

○滄浪…屈原説話。賢者が、滄浪の水（世間、政治）が清らかならば冠を洗おう（仕官しよう）、濁っているならば、足を洗おう（退隠しよう）と歌った（「楚辞」漁父）。　○黯淡…薄暗い、希望がない。澹澹ならば、水がゆったりと広がる、また心が静かで動揺しない。　○雲闕…雲のように大きな宮闕。劉宋鮑照「代陸平原君子有所思行」に「西上登雀台、東上望雲闕（西では銅雀台に登り、東では雲闕を望見する）」とある。　○初陽…冬至後の一節、あるいは朝日。ここでは後者で解した。　○樾…木陰。　○營…營払で、塵を払って磨き光沢を出す。惑いを去って真理を悟ることの比喩としても用いられる。　○玉膏…玉の油脂、仙薬。「山海経」西山経に「丹水出焉……其中多白玉、是有玉膏」とある。　○兀…無知の様。孫綽「遊天台山賦」に「渾万象以冥観、兀同体於自然（万物を等しく達観して、知恵を無くして自然の道に合体する）」とある。　○応寂…応を「応える」ととるならば、「静寂の境地に応じる」「静寂の境地にある」。「まさに…べし」ととるならば、「静寂の境地にあるであろう」となる。ここでは前者で解した。　○明心…心を清明純正にすること。　○澹然…静かで安らか。

■口語訳

夕日の輝きに山の緑も深く
その残光がこの洞窟にも差している
小さな小舟に退隠の心を示し
薄暗い中で花の影も消えていく
西のかた天台山に遊び
南を遠望しては雲闕にあい対す
そこで思いを馳せた、あの苔生す峰に
そこでは朝日で黒髪を洗うのだ
泉と蔦とが奥深い中に映え合っていて

清らかな木陰をなす松に鶴の姿が交わっている
碧なす大海が精神を清らかに洗い
玉の仙薬が人の体を潤す
そのうち不意に枯れ木の如くになり
動くことも微かとなって無知の域に達した
静寂の境地に達すれば、自分の中に世界があり
心を清明純正に保てば、己の他に何者も無い
小舟が浮かぶままにゆるゆるとめぐり
夜は静かに更けていくが、なお休むことはしない
ゆったりと心静かにして、思いは果てなく
我が身は波上の月とともに漂っていく

■解説

五言古詩。韻字は「窟・没・闕・髪・樾・骨・兀・物・歇・月」で、物のみ平水韻では入声五物の韻で、他は入声六月の韻。

常建は生没年不詳。開元十五年（七二七）に王昌齢とともに、進士に及第。大暦年間（七六六～七七九）に盱眙尉として任官した記録があるが、それ以外は不詳。「唐百家詩百八十六巻」に常建集があり、和刻本に「崔常詩集常建詩集」（熊谷維点、正徳三年刊［和刻本漢詩集成唐詩第一］）がある。原田憲雄「常建詩校注」『京都女子大学人文論叢』（第十三号、一九九六年）、山田哲平「五感の彼岸　常建・銭起試論」『明治大学教養論集』（通巻二九三号、一九九七年）など。

この詩は制作年代も不詳だが、白龍窟という洞窟（鍾乳洞か？）の池に船を浮かべて、天台山にいる人に思いを寄せたもの。天台山にいる人とは誰であるのかは分からない。詩はかなり難解であり、無理な訳をしたところも少なくない。再挑戦したい。道を求める道教的な部分や仏教の悟りの世界を織り交ぜているようである。小舟に乗ってゆるやかに漂う感覚を、淡々とした捉え難さの中で表現しているように思える。

【27】將適天台留別臨安李主簿

將に天台に適かんとし臨安の李主簿に留別す

孟浩然

☆前集巻上

★文苑巻二八六（留別）、唐百、全唐詩巻一五九、孟浩然集（四部叢刊初編）巻一

枳棘君尚棲　枳棘に君尚ほ棲み
匏瓜吾豈繫　匏瓜　吾豈に繫がらん
念離當夏首　離（わか）れを念ふこと夏首に當り
漂泊指夷裔　漂泊して夷裔を指す
江海非墮遊　江海は墮遊に非ず
田園失歸計　田園に歸計を失ふ
定山既早發　定山　既に早く發し
漁浦亦宵濟　漁浦　亦た宵に濟る
泛泛隨波瀾　泛泛として波瀾に隨ひ

行行任艫枻　　行行として艫枻に任す
故林日已遠　　故林　日に已に遠く
群木坐成翳　　群木　坐（やうや）く翳を成す
羽人在丹邱　　羽人　丹邱に在り
吾亦從此逝　　吾も亦た此より逝かん

■校勘

題名を、唐百は「別李主簿」とする。

［念離當夏首］文苑作誰念離亭下〔集作當夏〕、唐百作念離當夏日、全唐詩〔一作誰念離亭下〕。　［漂］文苑作淡〔一作標〕、全唐詩〔一作淡〕。　［夷］文苑・全唐詩・孟浩然集作炎。　［堕遊］底本作情遊。従文苑・孟浩然集改堕遊。唐百作遊情、全唐詩作墮〔一作惰〕遊。　［定］文苑・百唐作空。　［泛泛］文苑作汎汎。

■語注

○臨安…杭州府臨安県。　○李主簿…不詳。主簿は職名で、県に置かれ、文書の管理を任務とする。　○枳棘…いずれもとげのある低木。「後漢書」巻七六仇覧伝に、主簿という低い地位についていた仇覧に、上司である王渙が「枳棘非鸞鳳所棲（枳棘といった悪木は鸞や鳳凰のようなすぐれた鳥が宿るところではない）」と述べた挿話がある。賢人に似合わない低い地位。　○匏瓜…瓜の一種。匏繋とは食べられずにただぶら下がっている瓜。無用なものや人の喩え。「論語」陽貨篇に「曰……吾豈匏瓜也哉、焉能繋而不食（瓜ではあるまいに、ぶら下がっていて食べられないということができようか）」とある。　○夏首…初夏。　○夷裔…どちらも夷狄、異民族、またその地。裔夷ならば「左氏伝」定公十年に「裔夷之俘、以兵亂之」とある。また文苑のごとく炎夷ならば、炎が南方を象徴し、南の夷狄の住む土地という意味になる。　○堕遊…生産に携わらずただ遊んでいること、またその人。　○帰計…聞き従うべき計略、手だて。「史記」淮陰侯列伝に「僕委心帰計、願足下勿辞（私は従うべき策のままにしようと思います、どうかあなたも辞することはやめてください）」とある。　○定山、漁浦…地名。謝霊運「富春渚」（「文選」巻二六）に「宵済漁浦潭、旦及富春郭。定山緬雲霧、赤亭無淹薄（夜明けには漁浦という名の淵を出発し、朝に富春の城郭に着いた。定山は雲や霧の彼方にかすみ、赤亭のあたりは［流れが早くて］船を留めることができない）」とあり、どちらも富春江沿いの地名である。謝霊運は始寧から永嘉へ赴く途上に富春渚を経由したようだが、孟浩然は臨安から富春に至り、そこから謝霊運が来た道を逆にたどったようである。漁浦については、孟浩然に「早發漁浦潭」の詩がある。　○泛泛…浮かび漂う様。文苑の如く汎汎ならば、水が漲る様。　○波瀾…波。　○艫枻…艫は船の舳先や船尾。枻は梶。あわせて船を表す。　○故林…故郷を指す。　○羽人、丹丘…「楚辞」遠遊に「仍羽人於丹丘兮、留不死之旧郷」、孫綽「遊天台山賦」に「仍羽人於丹丘、尋不死之福庭」とある。

■口語訳

あなたはふさわしくない低い地位に留まられるが

私は瓜のようにただぶら下がっているだけなのはいやだ
この初夏の時にあなたとお別れして
漂いながら遠い夷狄の住む土地を目指していく
江海を行くのはただ無駄に過ごしているではない
田園をさまよう内に、聞き従うべき手だてを見失ってしまった
のだ
あの謝康楽先生がなされたように、私も定山を早朝に出発し
宵には漁浦潭を渡ることになろう
波にまかせて浮かび漂い（ひろびろとした水面を波にまかせて
漂い）
船の行くままに進んでゆく
故郷は遠く離れてしまったけれど
辺りは次第に木々に囲まれてきて日陰を作っていて快適だ
神仙ともいうべき道士が丹丘にはいらっしゃる
私もまたその地へ赴いていこう

■解説

五言古詩。韻字は「繫・裔・計・濟・枻・翳・逝」で、平水韻では去声八霽の韻。

孟浩然は、字も浩然ともいい、襄州襄陽（湖北省）の人。その世系や事蹟には不明な点が多い。没年は開元二十八年（七四〇）で、通説では卒年を五十二歳とし、溯って生年を則天朝の永昌元年（六八九）とする。しかし山本巌は、卒年を五十歳とし、生年を則天朝の天授二年（六九一）とする説を唱えている。若い頃、地元の鹿門山に隠棲し、白雲道士のものとで修学したらしい。のちに洛陽に出て士人と交わり、開元十五年（七二七）には長安に赴いて科挙の試験を受けたが落第。失意の彼は故郷に帰るが、同十八年（七三〇）に越の地を遊覧する。天台山を訪れたのはこの折であったと思われる(7)。そののち故郷に戻ったが、同二十五年（七三七）には、丞相であった張九齢の従事となっている。同二十八年に、王昌齢に看取られて没している。「旧唐書」巻一九〇下、「新唐書」巻二〇三本伝。「唐才子伝」巻二。「孟浩然集」は諸本あるが、四部叢刊初輯所収は四巻本。和刻本に「孟浩然詩集」（不分巻、元文四年刊［和刻本漢詩集成唐詩第一］）、同「孟浩然詩集（襄陽集）」巻中（北村可昌点、元禄三年刊［和刻本漢詩集成唐詩第一］）がある。校注本に、李景白校注『孟浩然詩集校注』（巴蜀書社、一九八八年。李校注と略）、徐鵬校注『孟浩然集校注』（人民文学出版社、一九八九年。徐校注と略）、曹永東箋注『孟浩然詩集箋注』（天津古籍出版社、一九九〇。曹箋注と略）、趙桂藩注『孟浩然集注』（旅游教育出版社、一九九一年。趙注と略）、佟培基箋注『孟浩年詩集箋注』（上海古籍出版社、二〇〇〇年。佟箋注と略）がある。伝記については、黒川洋一「孟浩然の生涯」『大阪大学教養部研究集録　人文・社会科学』（第二八輯、一九八〇年）、山本巌「孟浩然行年考」『宇都宮大学教育学部紀要　第1部』（第三〇号、一九八〇年）があり、加藤国安「孟浩然と天台山――霊山での至高経験」『東洋古典學研究』（第一八号、二〇〇四年）は、孟浩然の天台山訪問を論じる。

孟浩然には天台山に直接関わる詩が数首見られる。ここでは加藤に従い、いずれも同じ折の作品と見る。

【27】の詩は、天台山へ向かう途上、浙江の臨安県で知人に

別れた留別の詩である。謝霊運の詩を踏まえた表現が見られるのは、先輩の山水詩人のありように自らを重ねる思いがあったからであろうか。謝霊運の詩は、彼が始寧から永嘉へ赴任する際（永初三年頃）のものらしいが、彼には曹娥江を溯って天台山に近い天姥山を訪れた時の作品（「登臨海嶠、初發疆中作」）もある。孟浩然もほぼ同じルートで天台山へ向かっており、先人を思い起こしながらの詩作であろう。

加藤はこの詩には孟浩然の官界への深い失望感が表されているという。天台山は詩人の訪問先であるが、この詩ではまだ具体的なイメージは表出していない。ゆったりと波にまかせて進んだ先にあること、木陰をなす川筋の先にあることなど、天台山への道のりが、快適な自然の中にあることは表現されている。またすぐれた道士が修行をする聖地として捉えられている。これから訪れる、未だ見ぬ天台山に対する期待感が込められている。この詩には、謝霊運を踏まえたものは見られるが、孫綽の「遊天台山賦」や司馬承禎に関わる詩句は見られない。

【28】舟中曉望　　舟中にて曉に望む

孟浩然

☆前集巻上、許本巻一

★唐百、方外志巻二七、古今巻一二五、孟浩然集巻三

挂席東南望　席を挂けて東南に望めば
青山水國遙　青山　水國　遙かなり
舳艫爭利涉　舳艫　利涉を爭ひ
來往接風潮　來往　風潮に接す
問我今何去　我に問ふ今何くに去ると
天台訪石橋　天台に石橋を訪ねんとす
坐看霞色曉　坐（やうやく）く看る霞色の曉
疑是赤城標　疑ふらくは是れ赤城の標か

■校勘

題名を、方外志・古今は「舟中曉望台山」に、全唐詩は「舟中曉〔一作晚〕望」とする。

［挂］方外志・古今作掛。　［接］唐百・方外志・古今・孟浩然集・許本作任、全唐詩〔一作任〕。　［去］唐百・方外志・古今・孟浩然集・許本作適、全唐詩〔一作適〕。　［曉］全唐詩〔一作晚〕、孟浩然集作晚。

■語注

○曉望…諸テキストは「曉望」とするのが多いが、中国の校注本は徐校注を除いて「晚望」とする。実際の時間が曉なのか晚なのかは判断しがたいが、後の注に見るように、赤城山は曉の語と併称されることが多い。ここは曉がふさわしい。　○挂席…帆を上げること。孟浩然「彭蠡湖中望廬山」に「挂席候明発、渺漫平湖中」の表現があるが、更に溯れば謝霊運「遊赤石進航海」に「揚

帆采石華、挂席拾海月（帆をあげて海草を採り、蓆を掲げて海月を採集に行く）」の句がある。　○舳艫…元、船の船頭と船尾だが、のちには船全体を指す。　○利渉…元「易」需の「利渉大川」など、易の言葉。転じて船が流れに沿って順調にすすむこと。孟浩然は「泛舟経湖海」に「舟子乗利渉、往来逗潯陽」、「夜渡湘水」に「客行貪利渉、夜裏渡湘川」などと頻用する。　○風潮…風と潮。謝霊運「入彭蠡湖口」（「文選」巻二六）に「客遊倦水宿、風潮難具論（船旅の水上の宿りにも飽き、風や潮の困難さは詳しく論ずるまでもない）」とある。唐百などの如く「任風潮」ならば「風や潮に任せて行く」となる。　○霞色、赤城標…孫綽「遊天台山賦」に「赤城霞起以建標」とある。赤城山は赤土の砂礫が層をなしており、あたかも城壁の如くであるのでこの名がある。また唐徐霊府「天台山記」には「石色赩然如朝霞（その石が赤く輝いていて朝焼けのようである）」[8]とあり、朝靄夕霞が漂い纏うのも、この山にまつわる慣用的表現である。

■口語訳

帆をあげて船を出し東南の方角を眺めれば
青々とした山々や水郷が遙かかなたに横たわっている
船は先を争うように順調に進み
この往来では風や潮とともに行く
お尋ねしよう、どこへ向かっていらっしゃるのですか
かの天台山へ石梁飛瀑を訪ねているのです
霞たなびく暁の中で次第に見えてきたあの岩山は
思慕してやまなかった天台山の目印、赤城山ではないか

■解説

五言律詩。韻字は「遥・潮・橋・標」で、平水韻では下平二蕭の韻。

東南方向へ天台山へ向かう船旅の途上。まもなく赤城山に至ろうとしている。曹娥江を溯り、始豊渓に入って今度は東南に下ると天台県城近くに出る。そこから赤城山はすぐである。

赤城山が天台山の標識であるというのは、もちろん孫綽の賦を踏まえたものではある。しかし実際に彼の地を訪ねてみると、赤城山はまさしく天台山の入り口に聳える特徴的な景観をなしており、見る人にインパクトを与えるものである。この詩は、聞いており想像していた赤城山の景勝が、今将に目の前に現れようとしていることへの期待や、目の当たりにしての感動を描いたものだと見ることができる。赤城標の語は、孟浩然「宿終南翠微寺」に「緬懐赤城標、更憶臨海嶠（遙かに赤城の標識を思い、更には臨海の山を思う）」とあり、遠くから思い慕う対象として登場している。この詩が長安時代のものだとすれば、それは天台山訪問に先立つ。つまり長安時代に思慕していた天台山を、ようやくこの目で見ることができるという喜びが「舟中暁望」の詩には込められているといえよう。

【29】宿天台桐柏觀　天台の桐柏觀に宿す

孟浩然

☆前集巻上、勝蹟録巻三、許本巻九（桐柏仙都）
★文苑巻二二六（道門）、唐百、方外志巻二八、全唐詩巻一五九、古今巻一二六（桐柏山部芸文）、孟浩然集巻一

海汎信風帆　海汎　風帆に信(まか)せ
夕宿逗雲島　夕宿　雲島に逗(とど)まる
緬(はるか)尋滄洲趣　緬に尋ぬ滄洲の趣
近愛赤城好　近くに愛す赤城の好きを
捫蘿亦踐苔　蘿を捫き亦た苔を踐み
輟棹恣窮討　棹を輟めて窮討を恣にす
息陰憩桐柏　陰に息(やす)み桐柏に憩ふ
采秀弄芝草　秀を采りて芝草を弄ぶ
鶴唳清露垂　鶴唳きて清露　垂れ
鷄鳴信潮早　鷄鳴きて信潮　早し
願言解纓紱　願はくは言(ここ)に纓紱を解き
從此去煩惱　此より煩惱を去らん
高歩凌四明　高歩して四明を凌ぎ
玄蹤得二老　玄蹤に二老を得ん
紛吾遠遊意　紛たるかな　吾が遠遊の意
學彼長生道　學ばんかな　彼の長生の道
日夕望三山　日夕　三山を望めば
雲濤空浩浩　雲濤　空しく浩浩たり

■校勘

題名を、唐百・方外志・古今は「宿桐柏觀」とする。

［汎］前集〔一作行〕、文苑・全唐詩・孟浩然集作行、勝蹟録・方外志・古今・許本作泛。　［帆］許本作悦。　［城］佟箋注倣宋本孟浩然集作松。　［棹］文苑・勝蹟録・方外志作掉、全唐詩作櫂。　［恣］全唐詩作姿。　［窮］文苑〔集作探〕、全唐詩作探〔一作窮〕、孟浩然集作探。　［弄］唐百・方外志作尋。　［芝］勝蹟録作芳。　［唳］勝蹟録作涙。　［潮］文苑作朝。　［紱］文苑作絡、勝蹟録・方外志・古今作綬、全唐詩〔一作絡〕。　［去］全唐詩〔一作無〕。　［明］唐百・勝蹟録・方外志・古今・孟浩然集作壁、全唐詩〔一作壁〕。　［玄］古今・許本作元。　［蹤］文苑作縱〔集作蹤〕。　［得］許本作待。　［二］文苑・唐百・勝蹟録・方外志・全唐詩・古今・孟浩然集作三。　［學彼］文苑作學此〔集作樂彼〕、全唐詩作學〔一作樂〕彼。

■語注

○桐柏観…天台山の西部地域にある道観。呉孫権の創建になるなどの伝説があるが、確実なのは唐睿宗が司馬承禎のために重修したこと（「天台山記」）。かつては、麓の天台観から登った先にあり、奥深い山奥に突然開けた仙境のような雰囲気をなしていたらしい。天台道教の中心であったが、現在はダムが造られて移転しており、周囲に荘厳な雰囲気はない。山中道観ではあるが、かなり大型の施設であり、唐代には外来者の宿泊施設になっていたのが、この詩から読み取れる。　○滄洲…実際の地名というよりは、水

辺の土地をいい、隠者の住むところを象徴する。謝眺「之宣城、出新林浦、向版橋」（「文選」巻二七）に「既懽懐禄情、復協滄州趣（禄を得たいという心情にもかない、また隠遁したいという心にもかなうのだ）」とある。　○捫蘿、踐苔…蔦をつかみ、苔を践む、は、孫綽の賦にある天台山遊行の常套句。　○輟棹…棹を留める、舟を留めること。謝眺「新亭渚、別范零陵」（「文選」巻二〇）に「停驂我悵望、輟棹子夷猶（私は馬を留めて別れを思って歎き、君は船を留めて出発させず、ぐずぐずとためらう）」とある。　○息陰…木陰で休むこと。謝霊運「還旧園作、見顔范二中書」（「文選」巻二五）に「衛生自有経、息陰謝所牽（生を衛るには自ずと方法があるもので、木陰に休んで俗務に引っ張られることから遠慮したい）」とある。「荘子」漁父に、孔子を批判する老人の言として、影を恐れて走り回り死んでしまった人がいたが、木陰でしずかにしていれば影はついてこないのに、といった話がある。そこでは単に木陰で物理的に休息するのではなく、賢しらを棄てて道とともに憩うことが暗示されている。　○鶴唳、鷄鳴…唳は鳥などが鳴く。「論衡」変動篇に「夜及半而鶴唳、晨将旦而鷄鳴」とある。周処「風土記」（「初学記」天部露）に「白鶴性警。至八月白露降、流於草葉上、滴滴有声、則鳴」とある。孫綽「望海賦」（「太平御覧」巻九一八羽族部鶏）に「石鶏清響以応潮、慧躯軽近以遠潔」とあり、李善は「石鶏形似家鶏、而灰色。在海中山上。毎潮水将至、輙鳴相応、若家鶏司晨也」と注する。　○信潮…一定の間隔で必ず満干する潮。　○解纓紱…纓は冠のひも。紱は印綬。文苑の絡も同じく、ひもの類。自分を拘束するものを表す。孫綽「遊天台山賦序」に「方解纓絡、永託茲嶺（今、世俗の束縛から脱し、長くこの山に身を託そう）」とあり、李善は「纓絡、以喩世網也」と注す。　○高歩…世俗から高く離れて歩むこと。左思「詠史詩（其五）」に「被褐出閶闔、高歩追許由（そまつな服をまとって都の閶闔門から出て、高くかまえて古の隠者である許由のあとを追いたい）」とある。　○四明…四明山。孫綽「遊天台山賦序」に「登陸則有四明天台」とあった。　○玄蹤得二老…孫綽「遊天台山賦」に「追羲農之絶軌、躡二老之玄蹤（伏羲・神農の久しく絶えた道を追い、老子・老莱子の奥深い足跡をたどる）」とある。　○紛…盛んな様。「楚辞」離騒に「紛吾既有此内美兮（私の内には既に盛んな美質がある）」とある。　○長生道…「老子」第五九章に「深根固柢、長生久視之道（根を深く固くし、長生きをする道）」とあり、孫綽「遊天台山賦」に「雖一冒於垂堂、乃永存乎長生（ひとたびは危険を冒すことになるが、かえって長生の道を保つことになるのだ）」とある。　○日夕…黒川は「夕方」、加藤は「朝な夕なに」。　○三山…神話上の神山。東海のかなたにある蓬莱・方丈・瀛州。　○雲濤…用例に乏しい。黒川は「雲と波」、加藤は「雲海」。　○浩浩…水が広々と広がる様。

■口語訳

海に浮かんでは、風が帆をふくらませるのに任せて進み
夕べには、雲の上の仙人の島に逗留する
はるかに隠者や神仙の趣のするこの土地にやってきて
赤城山のすばらしさを身近に愛でることができるようになった
私は山中遊行に出かけるが、蔦をつかみ、また苔を踏み
船を係留して、好きなままにあたりを訪ねまわる
木陰で休んだり、桐柏観で憩うたりし

秀でた華を摘んだり、霊芝を手にもてあそんだりする
鶴が声をあげれば、清らかな露が滴り
鶏が鳴けば、潮の流れが早くなる
官職への未練を捨て去り、世俗の束縛から解き放たれ
煩悩を捨て去ろう
気高くも四明山に登り
老子・老莱子といった古代の隠者の跡を追っていこう
私の遠遊の意志は益々盛んになり
彼処で長生の道を学ぶとしよう
昼も夜もかの三神山を遠望すれば
波のような雲がはるかひろびろと広がっていた

■解説

五言古詩。韻字は「島・好・討・草・早・悩・老・道・浩」で、平水韻では、上声一九皓の韻。

山本巌は、この詩は開元二十四年（七三六）頃の江南再訪時の作と見る。

遙か遠くからようやく天台山に到着したことから歌い始め、隠者や神仙に思いをはせながら山中を遊行する様を歌う。謝眺や謝霊運の詩を踏まえた表現があり、また孫綽の賦から取った語句も散見する。ただし、六朝期や初唐の作品の多くが、孫綽の賦から有名な語（例えば「瀑布」「琪樹」など）を引くに留まっていたのに対し、孟浩然は詩句を自らの詩の中に織り込んでる点で異なっている。自らの天台山体験を踏まえながら孫綽の賦を振り返っているのであろう。

【30】越中逢天台太一子　越中にて天台の太一子に逢ふ

孟浩然

☆前集巻上

★文苑巻二二七（道門）、唐百、全唐詩巻一五九、古今巻一二

五、孟浩然集巻一

僊穴逢羽人　僊穴にて羽人に逢はんとし
停艫向前拜　艫を停めて前に向ひて拜す
問余涉風水　余に問ふ　風水を涉り
何事遠行邁　何事ぞ　遠く行邁すと
登陸尋天台　陸に登りて天台を尋ね
順流下吳會　流れに順ひて吳會に下る
茲山夙所尚　茲の山　夙（つと）に尚ぶ所
安得聞靈怪　安んぞ靈怪を聞くを得ん
上逼青天高　上は青天の高きに逼り
俯臨滄海大　俯して滄海の大なるに臨む
鷄鳴見日出　鷄鳴きて日の出づるを見
毎與神僊會　毎に神僊と會ふ
來去赤城中　來去す赤城の中
逍遙白雲外　逍遙たり白雲の外

莓苔異人間　莓苔は人間に異なり
瀑布作空界　瀑布は空界を作せり
福庭長不死　福庭は長く不死にして
華頂舊稱最　華頂は舊より最と稱す
永懷從此遊　永く懷ふ　此に從ひて遊び
何當濟所届　何當か届る所に濟らんことを

■校勘

題名を、全唐詩・古今は「越中逢天台太乙子」に作る。

［事］前集〔一作處〕。全唐詩・古今作處。　［夙］唐百作風。

［聞］文苑作問〔集作聞〕、唐百・古今作問、全唐詩作問〔一作聞〕。　［每與神僊會］文苑作常與仙人會〔集作每與神仙會、諸本皆重押會字、惟一本常覿仙人旆〕、全唐詩作常覿仙人旆〔一作每與仙人會〕、古今作常覿仙人旆、唐百・孟浩然集作每與仙人會。　［來去］全唐詩作往來〔一作去去、又作來去〕、古今作往來。　［作］文苑〔集作當〕、全唐詩作當〔一作作〕、古今作當。

［不死］全唐詩作自然〔一作不死〕、唐百・古今作自然。　［華頂］文苑作勝境〔集作華頂〕、全唐詩〔一作勝境〕。　［懷］文苑・孟浩然集作願、全唐詩作此〔一作懷、又作願〕、古今作此。

［此］文苑・古今作之、全唐詩作之〔一作此〕。

■語注

○越中…浙江省あたりを指す。天台山での作であろう。　○太一子…道士の名、不詳。のちの【32】にも登場する。太一は太乙とも。天地創造の元気、天神、星など。字号によく用いられる。

○羽人…「楚辞」遠遊に「仍羽人於丹邱兮、留不死之旧郷（飛僊に従って常明のところに行き、神僊のいます不死の郷に留まる）」とある。　○邁…行く。「詩経」王風黍離に「行邁靡靡、中心揺揺（道をとぼとぼとたどり、心の中は揺れ動く）」とある。　○登陸尋天台…孫綽の賦の表現。【25】語注。　○呉會…後漢時代には、会稽郡を呉と会稽の二郡としていた。浙江省あたりを差し、ここでは天台山のある地域を指す。　○靈怪…ここでは神霊のことか。

○雞鳴…一般的な朝を告げる鶏か。あるいは神話上のことなら、「玄中記」（「芸文類聚」巻九一鶏）に「東南有桃都山。上有大樹。名曰桃都。枝相去三千里、上有天鶏。日初出、照此木、天鶏即鳴。天下鶏皆隨之」とある。　○赤城、白雲…赤城は孫綽賦に既出の、天台山を代表する赤城山。白雲は一般的には神仙に関わる象徴だが、天台山と関わらせてみると、司馬承禎が白雲を称していた。

○瀑布、界…孫綽「遊天台山賦」に「瀑布飛流以界道」とある。

○福庭…幸いの土地。【27】「羽人」語注。　○華頂、最…華頂峰がどう「最」なのか、はっきりしないが、高さでいえば天台山中最高峰である。徐霊府「天台山記」に「上華頂峰。此天台極高処也（華頂峰に至る。ここは天台山の最高峰である）」(9)とある。

○濟所届…木華「海賦」（「文選」巻一二）に「一越三千、不終朝而濟所届（一気に三千里を越えて、朝の内に目的地に到達する）」とある。

■口語訳

神仙の棲まう洞窟で道士にお会いすべく
船を留めて前に向かって礼拝する

お尋ねするが、風や波をおして渡り
遠く行かれるのはなぜですか
孫綽に倣い、陸に上がって天台山を尋ねようとし
川に沿って呉会の地へ下るためなのです
この山はかねてより尊崇されてきたところで
なんとか神霊のことを聞きたいものだと思っていた
この山に登れば、上は高い青天にも近づくことができ
伏して眺めれば眼下に滄海が広がっているのが見える
鶏が鳴けば朝日が出て一日が始まるが
ここでは毎日神仙とお会いできる
赤城山の中を上り下りし
白雲のあたりをぶらぶらとする
苔生した石橋のあたりは人間世界とは異なる気配があり
瀑布が一筋、空を区切るように流れ落ちている
この仙界はかつてより不死の境であり
華頂峰は中でも最もすばらしい（あるいは「高い」）
ずっと思ってきた、この地で遊んで
何時の時か窮極の境地にいたることを

■解説

五言古詩。韻字は偶数句末。「拝・邁・怪・界・届」で、平水韻では去声一〇卦の韻と、「会・大・会・外・最」で、平水韻では去声九泰の韻。

【28】に登場の太乙子に逢って、という詩だが、天台山での遊行体験と神仙への憧れを歌ったもの。この詩も「楚辞」や孫綽の賦を踏まえるが、単に言葉を再利用するのではなく、孟浩然が作り出す世界を構成するものとなっている。川を下ってきたという表現は、始豊渓を経由してきたというこれまでの詩と同様である。また海との関わりも同様。

【31】寄天台道士　天台の道士に寄す

孟浩然

☆前集巻上
★文苑巻二二七（道門）、唐百、全唐詩巻一六〇、孟浩然集巻三

海上求僊客　海上に仙客を求め
三山望幾時　三山　望むこと幾時ぞ
焚香宿華頂　香を焚きて華頂に宿し
裛露採靈芝　露に裛（うるほ）ひて靈芝を采る
屧踐莓苔滑　屧しば踐む　莓苔の滑なるを
將尋汗漫期　將に尋ねんとす　汗漫の期
儻因松子去　儻（も）し松子に因りて去らば
長與世人辭　長く世人と辭せん

■校勘

［求］孟浩然集作來。［踐］全唐詩作躡〔一作踐〕。［儻］

全唐詩作倘。

■語注

○海上求僊客…「史記」秦始皇本紀などでいう、徐福らに海上の三神山を求めさせた話を踏まえるならば、孟浩然の時代から九百年以上前のこととなる。　○裛露…謝霊運「入彭蠡湖口」（『文選』巻二六）に「乗月聴哀狖、裛露馥芳蓀（月の下で猿の哀しげな声を聞き、露に潤って香しい香草の香りを嗅ぐ）」とある。　○汗漫…広大無辺で計り知れないこと。「淮南子」道応訓に、廬敖という存在が、遠遊して世界を経巡ったと誇ったところ、ある存在がそれをまだまだ小さいことだとして「吾与汗漫、期于九垓之上。吾不可以久（私は汗漫と九天の上で逢う約束をしている。お前の相手をしている暇はない）」として雲の彼方へ消えていった、という説話を載せる。ここでは汗漫は、おおきな存在を擬人化したもの。

■口語訳

海上に神仙を求めて
三山を望んでから一体どれくらいの年月がたったのだろう
（しかし今はそうした海上に神山を求めることなく）
この天台山において香を焚いて華頂峰に宿泊し
露に潤いながら霊芝を摘み取る
苔生した滑りやすい石橋を渡り
汗漫という神仙的存在と逢う約束を果たしに行く
もしも赤松子に連れて行ってもらえるならば
この人間世界から永遠にお別れができるのに

■解説

五言律詩。韻字は「時・芝・期・辞」で、平水韻では上平四支の韻。

始皇帝の神三山探訪説話や「淮南子」に見られる神仙説などをちりばめ、天台山の神仙的雰囲気を描いている。

【32】尋天台山　天台山を尋ぬ

孟浩然

☆前集巻上、勝蹟録巻一
★唐百、方外志巻二七、全唐詩巻一六〇、古今巻一二五

吾友太一子　吾が友　太乙子
飡霞臥赤城　霞を飡ひて赤城に臥す
欲尋華頂去　華頂を尋ね去らんと欲す
不憚惡溪名　悪谿の名を憚らずして
歇馬憑雲宿　馬を歇す　雲に憑りし宿に
揚帆截海行　帆を揚げて海を截ちて行く
高高翠微裏　高高たる翠微の裏
遙見石梁横　遙に見る石梁の横たわるを

■校勘

題名を、孟浩然集は「尋天台山作」に作る。
［友］唐百・勝蹟録・方外志・古今作愛、全唐詩〔一作愛〕。
［一］全唐詩・古今作乙。　［飡］勝蹟録・方外志・全唐詩・古今作餐。　［溪］全唐詩作谿、古今作榮。

■語注

○惡谿…固有名詞ならば、浙江省の川。「元和郡県志」巻二六には、急流や瀬の連続であったので悪渓と呼ばれていたのを、隋の開皇中に「麗水」に改めたという。また「新唐書」地理志では、水怪が多いため悪渓と呼ばれていたが、段成式が善政を布いたところ、水怪が去った。そこで民は好渓と呼ぶようになったという。徐校注は、孔子が盗泉の名をはばかってその水を飲まなかったが、自分は天台山を思慕してやまないので、孔子とは異なって悪渓という名をはばからないのだ、と解す。　○歇馬…馬を休ませる、あるいは休んでいる馬。庾信「帰田詩」に「樹陰逢歇馬、魚潭見酒船（木陰では休んでいる馬がおり、魚の潜む深い淵には酒を運ぶ船が見える）」とある。　○憑雲…謝恵連「雪賦」（「文選」巻一三）に「憑雲陞降、從風飄零（雲に乗って上下し、風に吹かれて漂い落ちる）」とある。　○揚帆…謝霊運「遊赤意志進航海」に「揚帆采石華、挂席拾海月」とある（【28】に既出）。

■口語訳

わが友の太一子は
霞を食らって赤城山（天台山）を住処としている
私も華頂峰を尋ねていこう
そこが、悪渓と呼ばれるところであるにもかかわらず
かくして雲に乗ったような奥深い所で馬を憩わせ
帆をあげて海を断ち切って渡っていく
高く聳える翠の山に
遙かに石橋が横たわっているのが見えた

■解説

五言律詩。韻字は「城・名・行・横」で、平水韻では下平八庚の韻。

天台山に太一子という道士を訪ねて。孟浩然が天台山を訪れたのは、この道士に会いに行くことも目的の一つであったのだろう。残念ながら太一子については何も分からない。孟浩然の天台山訪問が、開元十八年頃だとすると、司馬承禎が天台山を去ったのが同十五年であり（本稿注6）、その数年後ということになる。司馬承禎門下の道士たちがまだたくさん残っていたと考えると、そうした人々の中の一人であり、孟浩然とも既に親交があったものだろう。この詩は天台山訪問を、全体的に振り返るようなものとなっている。

【33】桐柏観　　桐柏観　　孟浩然

☆方外志巻二八

上盡崢嶸萬仞巔　上は崢嶸を盡くす萬仞の巔
四山圍繞洞中天　四山圍繞す　洞中の天
秋風吹月瓊臺曉　秋風　月を吹く　瓊臺の曉
試問人間過幾年　試問す　人間（じんかん）幾年を過ぐと

■校勘

＊方外志を底本とする。

■語注

○崢嶸…高く険しい、また奥深い様。孫綽「遊天台山賦」に「披荒榛之蒙蘢、陟峭崿之崢嶸」（生い茂る雑木林を切り開き、険しく側だった高い崖を登る）」とある。　○瓊臺…玉の台、あるいは玉のように輝く台。孫綽の賦にも登場するが、のちには天台山中のある岩山を指す固有名詞となる。

■口語訳

高々とその険しさを極めた万仞の巔にあり
周囲を山々に囲まれて、洞中の天のよう
秋風が月に吹き寄せ、やがて瓊臺で朝を迎えたが（短い時間しかすぎていないのに）
（仙界と俗世とでは時間の早さが違うので）お尋ねします、人間世界では何年が過ぎたのですか

■解説

七言絶句。韻字は「巔・天・年」で、平水韻では下平一先の韻。

方外志では、題名は無いが、「桐柏観」の標題の下におかれ、孟浩然の作とする。他の全唐詩・孟浩然集などの諸書には掲載されておらず、各種訳注でも取り上げられていない。

孫綽賦の語が二語見える。いわゆる遊仙詩に属するだろう。

【34】送邢濟牧台州　邢濟の台州に牧たるを送る

僧皎然（孟浩然）

☆前集巻下、許本巻五（一）石橋方広
★文苑巻二七四（送行）、全唐詩巻八一八、皎然集（四部叢刊初編）巻四

海上名山屬使君　海上の名山　使君に屬し
石橋琪樹古來聞　石橋琪樹　古來聞こゆ
他時畫出白團扇　他時畫き出す白團扇
乞取天台一片雲　乞ふ　天台の一片の雲を取らんと

■校勘

題名を、文苑は「送獨孤使君赴岳州（獨孤使君の岳州に赴くを

送る)」に、全唐詩は「送邢台州濟（邢台州濟を送る）〔一作送獨孤使君赴岳州〕」に、皎然集・許本は「送邢台州濟」に作る。

［名］文苑・全唐詩・皎然集・許本作仙。　［古］文苑作此、全唐詩〔一作此〕。

■語注

○邢濟…徐校注によれば、邢濟は上元元年（七六〇）から永泰元年（七六五）まで桂州刺史・桂管経略史をつとめたとする。『新唐書』巻二二二では、至徳元年（七五六）に西原蠻が反乱を起こし、四年間の間治まらなかった。朝廷は、反乱が起こった二年後の乾元元年（七五八）に平定の軍を差し向けたが、すぐには治まらず、桂管経略史であった邢濟が撃ち平らげた、という。いずれにせよこの邢濟は、粛宗朝で役人として活躍しており、孟浩然からはやや後れる。皎然は粛宗朝頃のひととされており、そちらの方がふさわしいかも知れない。　○使君…天子の使者。　○石橋、琪樹…孫綽の賦に見える天台山頻出語。　○他時…今より以前、あるいはその時以後。ここでは後者で解した。

■口語訳

海上にあるという名山、つまり天台山のことは天子の使者であるあなたに託そう
そこにあるという石橋や琪樹については、古来より名が知られている
これから白い団扇に絵を描くならば
天台山の白雲をひとひら取ってきて下さい

■解説

この詩を孟浩然の作とするのは、徐校注のみ。文苑・全唐詩・許本は僧皎然の作として収録。徐校注以外の訳注では取り上げていない。

七言絶句。韻字は「君・聞・雲」で、平水韻では上平一二文の韻。

天台山方面に赴任する人を送る歌。孫綽の賦の語を用いるというおきまりのものだが、後半の二句には「白雲」の語を暗示させる表現がある。

［注］

（1）本稿は同趣旨の論文の五本目で、先立つものは次の通り。
「天台山の詩歌（其一）――六朝以前（上）」『埼玉大学紀要　教育学部』（第五八巻第一号、二〇〇九年）…「天台前集」の序文と、六朝以前の詩を三点を検討した。
「同（其二）――六朝以前（中）」『同』（第五八巻第二号、二〇〇九年）…六朝以前の詩を十三点検討した。
「同（其三）――六朝以前（下）」『同』（第五九号第二号、二〇一〇年）…六朝以前の賦を二点検討し、六朝までの状況を確認した。
「同（其四）――初唐」『同』（第六〇巻第一号、二〇一一年）…初唐期の詩を十八点を検討した。

（2）この文献は近年入手したので、今後校勘に用いる。明代の潘璸の撰になる天台山関係の詩集で、林応麟により、嘉靖二十五年（一五四八）に刊行された。近年、浙江文献集成の一環として、胡正武による校勘本

が出された（浙江大学出版社、二〇一〇年）。本稿はこの校勘本による。

（3）天台山に関わる可能性があるが、本稿に収録しなかったものについて以下紹介する。

王昌齢に「送韋十四兵曹」（文苑巻二七〇、全唐詩巻一四〇）と、「観江淮名勝図」（河岳英霊集巻中、全唐詩巻一四一）があるが、これらは対象から外した。前者は送別の詩で、韋某を褒めた部分に「跡在戎府掾、心遊天台春。独立浦辺鶴、白雲長相親（跡は戎府の掾に在り、心は天台の春に遊ぶ。独り立つ浦辺の鶴、白雲　長く相い親しむ）」の句がある。「天台の春」「白雲」という語に関わりが伺えるが、直接天台山を対象としたものではないと判断される。後者は長江や淮水を画いた図を観ての作で、全唐詩では「淡掃荊門煙、明標赤城焼」と「赤城」の語が見える。しかし河岳英霊集では、同じ部分を「淡掃霏素煙、濃抹映殘照」とし、天台山との関わりを示す語句がない。

また劉長卿に天台山に関わる詩が数点見られるが、近年の研究では、彼は中唐の詩人として位置づけられているので、後稿で取り上げる。

（4）「道教における鏡と剣」『道教思想史研究』（岩波書店、一九八七年）。初出は、『東方学報』京都（第四五冊、一九七三年）。

（5）拙稿『天台山記の研究』（中国書店、二〇一一年）四〇一頁、四五四頁。

（6）神塚淑子「司馬承禎と天台山」『名古屋大学文学部研究論集』（哲学五四号、二〇〇八年）。

（7）黒川洋一は、孟浩然が科挙を受けて落第したのは開元七年（七一九）で、その後洛陽に滞在したとする（「孟浩然の生涯」）。そして同九年（七二一）に越に向かい、会稽から海沿いに南下して台州へ至り、始豊渓を溯って天台山に入ったとする。山本巌は、天台山訪問は開元十五年のことだったとし、長安へ赴いたのはその後の同十八年であったとする。また長安では科挙の試験を受けたのではなく、貴顕の推薦によって官を得ようとしたのであろうとする。そして同二十四年（七三六）頃に江南を再訪したのであり、天台山にちなむ詩の中には再訪時のものもあるとする。

（8）注（5）拙稿、三八九頁、四五〇頁。

（9）注（5）拙稿、四一七頁、四五六頁。

（二〇一一年　四月　二八日提出）
（二〇一一年　五月　二〇日受理）